初期十字軍時代におけるシリアの小都市

——その外交交渉とシリアの勢力均衡構図——

中村妙子

はじめに

十二世紀前半のシリアでは、セルジューク朝の宗主権の衰退に伴い、北部のアレッポや南部のダマスクスのように周辺地域をも併せて支配していた大都市が独立政権の様を呈していた。また、そのほかに、セルジューク朝治下にあっても半独立国としての地位を保っていたアラブ領主や、同朝の軍隊の主力であったトルコ人アミール（武将）が自立化した小都市も混在していた。十字軍の侵攻に際して、[1] 激しい戦闘と併行して多くの協定が十字軍とシリア諸都市との間に締結され、[2] シリアに勢力均衡構図が生まれたが、大都市だけではなく、これらの小都市も単独で十字軍と外交交渉を行ない勢力均衡構図の一角を占めていた。とはいえ政治構造の大枠は大都市の動きによって構成されており、小都市の独自の外交はその間隙をぬうものであった。しかもイマード・アッディーン・ザンギー ʿImād al-Dīn Zangī（位一一二七—四六）が、約三十年間続いたこの勢力均衡構図を崩してシリア南進策をすすめる過程で、これらの小都市は順次ザンギーにのみこまれてしまう。

ところが、これらの小都市は、その後ザンギーのシリア南進策の中で、ザンギーの戦略上の駒として重要な位置を占め

ることになるのである。筆者はこれまでに、シリアの勢力均衡構図やザンギーの戦略について、いくつかの側面を分析しているが[3]、本稿では、十字軍との外交交渉を独自に行なった小都市に注目する。勢力均衡構図においては、規模が小さい都市でも、その構成要素の一つとして大都市と同様に重要性をもつ。これらの小都市がシリア勢力均衡構図の中で果たした役割について検証することによって、勢力均衡構図やその変化を明らかにすることができると考えるからである。小都市の外交関係という、いわばミクロの視点から、シリアの政治構造とその変化という全体像を読み解く試みである。

十字軍時代のシリアの小都市に焦点をあわせた研究は、管見の限りみられない。これは単独で取り上げるには規模が小さく、また点在する複数の小都市を総合的に論じるには都市間に共通性が少ないためであろう。そこで、本稿では、十字軍と独自に外交交渉を行なっていた四つの小都市をとりあげて、勢力均衡構図の中で果たした役割とザンギーの戦略とのかかわりという、一二世紀前半のシリアの政治構造を構成する二つの局面に的を絞って検証する。これにより、一見、関連性の見られない複数の小都市を同一俎上に乗せて論ずることが出来るのである。

アミールが政権をとっていたシリア北部のアザーズとマンビジュ、アラブ領主が政権を握っていたシリア中部のシャイザルと、ユーフラテス川沿いのカルアト・ジャウバル[4]の四つの小都市を対象とし、十字軍との協定や往来など一般に外交交渉とみなされるもののみならず、戦闘によって生じる対立関係や他のシリア諸都市との関係も幅広く検討する。

第一章　外交交渉におけるシリア小都市

（1）貢納金協定（シャイザル）

シリア中部のシャイザルは、アラブの在地領主であるムンキズ一族が独立して政権を構えるオロンテス川沿いの城塞都

市で、十字軍侵攻後まもなくからアンティオキアの十字軍との間で独自に貢納金協定を締結し、十字軍の指導者が交替しても継続していた。金額は、同様の貢納金協定を結んでいたシリア北部の大都市アレッポが二万ディーナールと馬であるのに対して、シャイザルは一万ディーナールである。ところが、アレッポでは、五〇七／一一一三―一四年の更新を最後に史料上に貢納金協定の記録は見られなくなり、五一四／一一二〇―二一年にはアンティオキアの十字軍とアレッポとの勢力範囲を確認する協定が、翌五一五年には貢納金にかわって「アレッポ周辺を折半する」という収穫分割の取り決めが行なわれるようになった。[5] このアレッポとアンティオキアの十字軍が行なっていた収穫分割は、シリア南部のダマスクスとイェルサレムの十字軍との間で行なわれていた広範な農地からの収穫を対象とするものとは異なり、度重なる戦闘による農地の荒廃や領土の支配権の移動にともなって両勢力の境界線が一進一退する中で、貢納金の提供が困難になり、その時々の収穫を優勢な者が相手方から取るという短期的な収穫分割であった。[6] しかし、シャイザルでは、アレッポが収穫分割協定へ移行したのと同時期の五一四／一一二〇―二一年にも貢納金協定の更新が行なわれ、「これ以前にフランクの慣行 ʿāda となっていた［ものと同額の］貢納金」[7] が定められた。この更新は、五一三／一一一九年のバラートの戦いでシール・ロジャーが戦死したあとアンティオキア公国を兼務の形で引き継いだイェルサレム王ボードワン二世との間に行なわれたものであった。これは、シャイザルに貢納金協定を履行できるだけの収穫の確保の見通しがあったことを示している。

（2）軍事同盟（アザーズ）

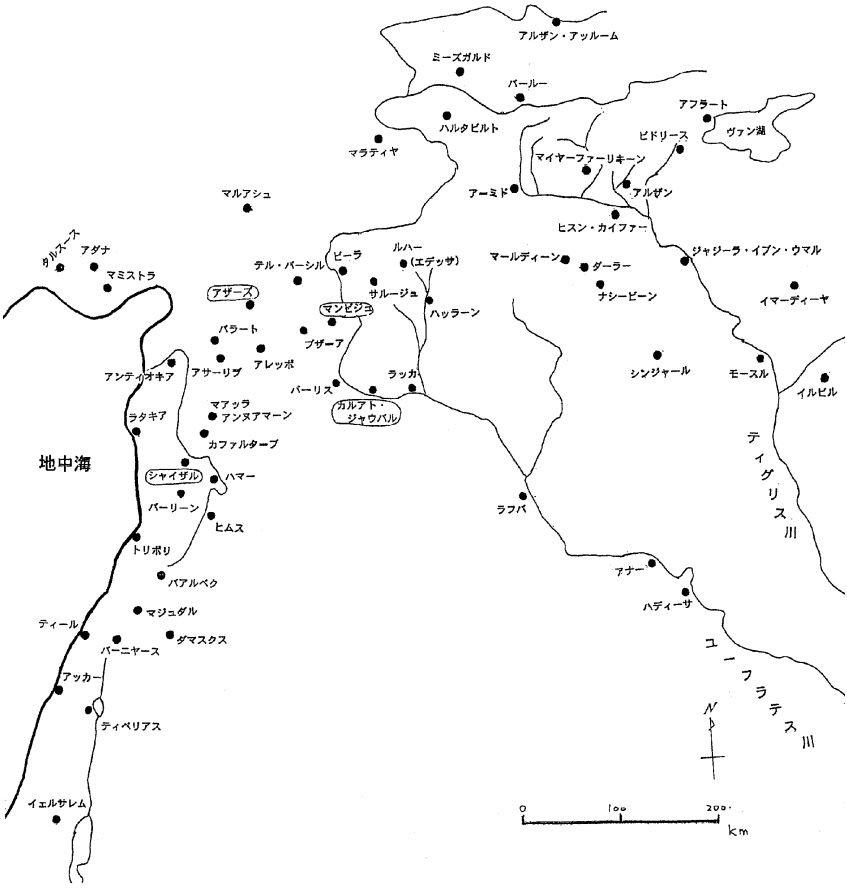
アレッポの勢力下にあったアザーズでは四九一／一〇九八年と五〇一／一一〇七―〇八年に、それぞれ時のワーリー（地方総督）がアンティオキアの十字軍と軍事同盟を結んでアレッポに反旗を翻している。四九一年の十字軍との同盟は一時的には成功したものの、アレッポのリドワーン王の反撃に敗れ、五〇一年の場合は、すぐさまリドワーン王が鎮圧して十

字軍の到着には至らなかった。[8] アザーズはセルジューク朝が四七一／一〇七八―七九年に統治を開始する前からアレッポの勢力下にあり、三〇〇近くの村 qarya をもち、その大部分はアレッポの市民 ahl の所有地 milk であった。[9] このようにアレッポとの結びつきの強いアザースのワーリーが離反した理由は不明であるが、十字軍をアレッポに対抗し得る勢力とみなしたために軍事同盟が生じたと考えられる。[10]

五一〇／一一一六―一七年アレッポのアターベク（君主の後見人）のルウルウが暗殺された後にアレッポが政権争いで混乱している中、五一一／一一一八年アンティオキアの十字軍がアザーズを攻撃し封鎖した。これはアザーズだけでなくアレッポをも苦しめた。アザーズの農地がアレッポの食糧の供給源であったからである。アレッポの市民は、結局、同年、マールディーンの領主イールガージー・ブン・アルトゥクにアレッポの統治を委嘱し、十字軍の駆逐を依頼した。そこでイールガージーは十字軍に金品の供与をもちかけてアザーズからの退去を求めたが、十字軍は応じなかった。[11] これを見たアザーズの住民はアレッポへ期待することをあきらめ、アザーズを十字軍に引き渡した。[12] アザーズは十字軍のもとでの安定を選んだのである。引き渡し協定締結後のアザーズでは十字軍はアザーズ地域に種を播き、アザースの農民たちを援助してからアンティオキアに戻った。このとき、一方のアレッポの市民は、アザーズを獲得したアンティオキアの十字軍との間に、イールガージーに頼らず自ら交渉して休戦協定 ṣulḥ を結んだ。その条件は、十字軍にテル・ハラークを引き渡すことと、四ヶ月分の戦費千ディーナールの支払いとしてアレッポ北方と西方を十字軍の権利地とすることであった。[13] 十字軍は、アザーズとそのほかに多くの農業地への権利を獲得したのであった。

この後、アレッポの新しい主権者が政権を獲得する度にアザーズの奪回を図ったが、いずれも失敗におわり、アザーズは十字軍の勢力下にとどまった。これには十字軍側の熱心な防衛作戦がある。五一七／一一二四年、アレッポを支配するアルトゥク一族のヌール・アッダウラ・バラクがアザーズを封鎖し攻撃したが、アザーズの十字軍は他地域の十字軍からの援軍を得てバラクを撃退した。[14] 五一八／一一二四年、戦死したバラクのあとを継いだいとこのティムルタ―シュは、バ

<12世紀前半のシリアとジャジーラ>



ラクが捕えてアレッポに投獄中であったイェルサレム王（アンティオキア公も兼任）ボードワン二世を釈放する条件としてアザーズの返還を求める内容を協定に盛り込んでいた。[15] しかし、この合意はボードワン二世の釈放直後に破棄された。ボードワン二世はティムルターシュへの書簡の中で「ローマ教皇がアザーズの引き渡しを撤回するよう私に命令した。教皇の命令には何人も従わねばならぬ」と協定破棄の責任をローマ教皇へ転嫁しているが、[16] それほどアザーズの重要性が高かったということであろう。ついでアレッポの政権を握ったブルスキーは、アレッポの政権を安定させると五一九／一一二五年、十字軍からの失地回復を図った。アザーズへの攻撃は投石機をもちいる大規模な包囲であったものの、アンティオキアとエデッサの十字軍が連合して抗戦したため奪回はならなかった。[17] またアザーズが十字軍の手に渡って以降、アザーズ内部からアレッポへの引き渡しの動きは史料中には見られない。

（3）軍事同盟（マンビジュ）

マンビジュはジャジーラとシリアとの通商路上にある小都市で、アレッポとテル・バーシルとユーフラテス川の三方向の中間に位置する。テル・バーシルは、ユーフラテス川の支流サージュール川上流の水利のよい地域で、十字軍侵攻時から十字軍の手中にあり、四九四／一一〇一年にイェルサレム王に転進するエデッサ伯ボードワン一世からジョスリーン一世が受け継いでいた。[18] エデッサ伯国内にあったがジョスリーン一世の自立の傾向が強かった。

マンビジュは、このテル・バーシルに拠るジョスリーン一世と五一八／一一二四年に軍事同盟を結んだ。この背景にはアレッポを統治していたアルトゥク一族のヌール・アッダウラ・バラクとの対立関係があった。バラクはマンビジュの領主ハッサーン・ブン・クムシュタキーンを捕え、そのすきにマンビジュを獲得しようと画策し、いとこのティムルターシュに「マンビジュに行き、ハッサーンにテル・バーシルへの攻撃に参加するように依頼し、出て来たところを捕えるよう

に[19]」と命令した。バラクはジハードを口実に使ってマンビジュの獲得を狙ったのである。しかし、マンビジュに残っていたハッサーンの兄弟イーサーが城塞にこもってバラクへの引き渡しを拒み、テル・バーシルに拠るジョスリーン一世に書簡を送ってバラクの軍隊の排除を依頼した。成功時のマンビジュの引き渡しを約束したものであった。ジョスリーン一世はこれに応えてイェルサレムやトリポリの十字軍から援軍を募り、バラクと対戦した。ジョスリーン一世がイーサーの提案に同意したのは、「[アレッポの]バラクがマンビジュを獲得することでバラクの勢力が強くなりすぎないようにするため[20]」で、シリアに突出した政権を作らないという勢力均衡政策に基づいた行動であった。戦闘はバラクの勝利に終わったが、バラクがその後のマンビジュへの攻撃中に戦死したため、捕えられていたハッサーンは戻り、マンビジュは独立を維持した[21]。

（4）十字軍勢力とシリア諸都市との仲介（カルアト・ジャウバル、シャイザル）

カルアト・ジャウバルを拠点とするウカイル一族は、一〇世紀末から一一世紀にかけてジャジーラから北シリアを支配していたウカイル朝の末裔である。四八〇／一〇八七―八八年、セルジューク朝との争いの末に、シャムス・アッダウラ・サーリム・ブン・マーリクがセルジューク朝スルタンのマリク・シャーからアレッポ明け渡しの代償として与えられたのが、ユーフラテス川沿岸のカルアト・ジャウバルと、バーリス、ラッカであった[22]。

四九七／一一〇四年、エデッサ伯ボードワン二世とテル・バーシルの領主ジョスリーン一世が、アンティオキア公国のボエモンド一世とタンクレッドを誘い、ジャジーラ地方のハッラーンを攻撃した。これに対してモースルの領主シャムス・アッダウラ・ジキルミシュとヒスンカイファの領主ムイーン・アッダウラ・スクマーン・ブン・アルトゥクが応戦し、ムスリム側が勝った。このハッラーンの戦いで捕虜となり、モースルに連行されたボードワン二世とジョスリーン一世[23]の身

代金や釈放についての仲介交渉を行なったのが、前述のサーリム・ブン・マーリクの息子でカルアト・ジャウバルを継いだシハーブ・アッディーン・マーリク・ブン・サーリムであった。ボードワン二世の身代金は七万ディーナールと決まり、先に解放されていたジョスリーン一世がカルアト・ジャウバルに運んだ前払金二万五千ディーナールをマーリクの使者がモースルに届けた。この間、モースルの政権はジキルミシュからジャーワリーに移っていたが、新領主ジャーワリーは、前払金を持った使者がモースルに到着した時点でボードワン二世を釈放した。残金の保証をしたのは「高名な人物で、有能な仲介者である」と評されている[24]マーリク・ブン・サーリムで、ジョスリーン一世を人質としてカルアト・ジャウバルに留めたのである[25]。ボードワン二世とジョスリーン一世が完全に解放されたのは五〇二／一一〇八年のことで、ボードワン二世にとっては約五年間の捕虜生活であった。ボードワン二世の不在中、エデッサ領主代理をつとめたアンティオキアのボヘモンドの甥のリチャードが、アンティオキアに有利な行動をとっていたことを釈放後に知り怒ったボードワン二世とジョスリーン一世は、同年アンティオキアのタンクレッドを攻撃したが、このときモースルの領主ジャーワリーに援軍の派遣を頼んでいる[26]。これは、マーリクの仲介による釈放交渉の過程で両者が親密になった[27]からであると考えられる。

約一五年後の五一七年初め／一一二三年四月、このボードワン二世とジョスリーン一世は、再度ムスリムの捕虜となった。このとき仲裁人 mutawassiṭ として動き、釈放交渉の段取りを取り仕切ったのは、シャイザルの領主アブー・アルアサーキル・スルターン・ブン・ムンキズである。イェルサレム王兼アンティオキア公になっていたボードワン二世と、エデッサ伯となっていたジョスリーン一世[28]は、アルトゥク一族のヌール・アッダウラ・バラクにジャジーラ北部で別々に捕えられ、他の十字軍指導者とともにハルタビルトに監禁された。その後、五一七年ジュマーダー・アルウーラー月／一一二三年七月バラクがいとこのバドル・アッダウラ・スライーマーンからアレッポの政権を奪ってまもなく、ジョスリーン一世がハルタビルトから単独で脱出するという事件が起こった。このためバラクはボードワン二世らをハッラーンに移したが、さらに、五一八年ムハッラム月／一一二四年二―三月、ハッラーンからアレッポに移送した[29]。それから約二ヶ月後、

前述のマンビジュ事件でバラクが死亡したあと、アレッポを継いだティムルターシュが五一八年ジュマーダー・アルウーラー月／一一二四年六月、ボードワン二世を釈放することに合意したのである。ボードワン二世釈放の条件として十字軍側に課されたのは、身代金八万ディーナールの支払いやアザーズを含む領土の返還など、実現すればアレッポには勢力回復の契機となるものであった[30]。釈放にあたって、仲介したスルターン・ブン・ムンキズは二段階の手順を踏んだ。まずはムンキズ一族の子供たちをアレッポに送って人質とし、引き換えにボードワン二世をアレッポからシャイザルへ運んだ。ついでシャイザルに十字軍側の子供たち一二人を人質として留めたのち、ボードワン二世を釈放したのである。このとき身代金の前払金の二万ディーナールがボードワン二世から支払われた[31]。

ところが、ボードワン二世は釈放されるとティムルターシュとの協定を破棄し、ヒッラの領主ドゥバイス・ブン・サダカと軍事同盟を結んでアレッポを攻撃した。この軍事同盟の仲介者がカルアト・ジャウバルの領主マーリク・ブン・サーリムである[32]。この軍事同盟は、ボードワン二世とドゥバイスの他に、ジョスリーン一世、リドワーン王の息子のスルターン・シャー、マーリクの息子のアリーなどアレッポを狙う十字軍とムスリムから成り、アレッポの包囲は半年間続いた[33]。攻撃は不成功に終わったものの、アレッポを支配していたアルトゥク一族のティムルターシュ政権が崩壊するという事態に至った。この軍事同盟に先立って、ボードワン二世とドゥバイス・ブン・サダカの間で成功時のアレッポの権利の分配に関する密約が取り決められており、その仲介をしたのもマーリク・ブン・サーリムであった。この密約の内容は、アレッポの政権そのものはドゥバイスが取り、十字軍はアレッポの財産とアレッポ領の村々を取るという取り決めである。この密約に基づく軍事同盟には、マーリクの息子アリーが参加していることからマーリク・ブン・サーリム自身もアレッポ獲得に際しての何らかの取り分を想定していた可能性が高いが、ボードワン二世釈放の仲介をしたムンキズ一族がこのアレッポ攻撃に関与している形跡は見られない。約半年のアレッポ包囲の間、人質としてシャイザルに留めおいた十字軍の一二人の子供たちとアレッポに人質として送られたムンキズ一族の子供たちの処遇はそのままであった。スルターン・ブ

ン・ムンキズは仲裁人としての立場を貫き、中立を保ったのである。[34]

第二章　勢力均衡構図とシリア小都市

前章で検討した外交交渉は、四つの小都市に関するものに限っており、一二世紀最初の約三〇年間に生成されたシリアの勢力均衡構図の全体像をあらわすものではない。しかし、戦乱期におけるこれらの小さな都市の、いわば生き残り作戦ともいうべき動静の中に、浮かび上がってくる構図に着目したい。

（1）独自の軍隊の存在

これら四つの小都市の外交交渉の中で、アザーズのみが性格が異なる。反乱に失敗した二人のアミール出身のワーリーたちは十字軍へ軍隊の派遣要請を行なったが、アレッポによって任命されているワーリーの立場は弱く、[35]アレッポ軍の出動に際して持ちこたえるだけの軍事力を持たないことを意味する。十字軍への引き渡しが実行された三回目の交渉（五一一／一一一八年）を行なったのは、「アザーズに住む人々 man bi ʿAẓāẓ」[36]であり、主導者ははっきりしない。五一〇／一一一六―一七年以降のアレッポの政権混乱期において、アザーズへのワーリーの派遣や統治がどのようになっていたかは不明であるが、独自の軍隊をもたない農業地アザーズにとって、ともかくも生活の糧である農業ができる環境を保証してくれる主権者を選んだのであろう。以後は、アザーズ自らが主導する外交交渉はなく、勢力均衡構図の中で十字軍へ帰属し続けることになったのである。[37]

これに対して、他の三都市はそれぞれ独自の軍隊を持っていた。前述のようにマンビジュはテル・バーシルへのジハー

ドが可能な軍隊を持ち、カルアト・ジャウバルにはアレッポ包囲戦に参加するだけの軍隊があった。シャイザルについては、前述の外交交渉の中には見えないが、史料中には、対十字軍戦出兵の記述が見られる。五〇五／一一一一年セルジューク朝スルタン・ムハンマドの提唱する四回目のジハードがシリアで立ち消えになったことを聞きつけて十字軍が大挙してアファーミーヤ付近に集結した。イェルサレム王ボードワン一世、アンティオキア公代理タンクレッド、トリポリ伯ベルトランの連合軍によるものであった。十字軍のシャイザルへの侵攻を恐れた領主スルターン・ブン・ムンキズは、ジハード立ち消え後もシリアに残っていたモースルの領主マウドゥードとダマスクスの領主トゥグタキーンへ援軍を求め、進軍した[38]。また、五〇九／一一一五―一六年、スルタン提唱の六回目のジハードの際には、領主スルターン・ブン・ムンキズの兄ムルシドが兵を率いてスルタンのジハード軍に加わり、十字軍領となっていたカファルタブを攻めている[39]。これらの攻撃に伴った兵力に関して史料では「ムンキズの軍隊とその市民[40]」という表現がもちいられている。シャイザルの北方にあるカファルタブと北東のアファーミーヤの二つの十字軍領とシャイザルの間の土地は畑作に適しており、オリーブ林もあった。この地帯には、穀物や綿の略奪にでかけることもあり、護衛役の数十名の騎士が率いていたのは農民と貧困者たちの集団である[41]。このようなシャイザルの軍事行動からは、正規軍と領主の意向によって行動をともにする民兵の存在がくみとれる。

（2）両勢力をつなぐ人脈

アザーズを除く三つの小都市の外交交渉に登場するキーパーソンは、ボードワン二世とその甥ジョスリーン一世である。前述のように両者とも二回の捕虜体験があった。一回目は四九七／一一〇四年ハッラーンの戦いの後に、二回目は五一七／一一二三年ジャジーラ北方で捕えられたのである。ボードワン二世の監禁場所と期間は、一回目がモースルとカルアト・

ジャウバルで通算約五年間、二回目はハルタビルト、ハッラーン、アレッポ、シャイザルと場所が変わり約一年半にわたった。ジョスリーン一世は、一回目は先に身代金を支払い釈放され、二回目は単独脱出したため監禁期間は短いが、一回目はその後の交渉にあたったため、カルアト・ジャウバルやモースルを行き来している。

ボードワン二世の一回目の監禁時にはエデッサ伯であるボードワン二世の下でジョスリーン二世がテル・バーシルを治めており、二人の勢力範囲はシリアとジャジーラにまたがるエデッサ伯国内であったが、二回目の監禁時には、ボードワン二世はイェルサレム王とアンティオキア公を兼ね、ジョスリーン二世はエデッサ伯（テル・バーシルを含む）となっており、二人でほぼシリア全体の十字軍を束ねていた。

前章で検討したマンビジュとジョスリーン一世との軍事同盟の成立は、アレッポの領主バラク[42]がボードワン二世をハッラーンからアレッポに移送してまもなくのことであった。すなわちジョスリーン一世は、アレッポのカルア（城砦）に監禁されているボードワン二世の救出を試みていたところであったのである。このためジョスリーン一世とバラクは、アレッポ周辺で攻防を繰り返し、緊張関係にあった[43]。この中で起こったマンビジュ事件に続く軍事同盟締結以前にもマンビジュとジョスリーン一世の間に何らかの交渉があったかどうかは不明であるが、後年ザンギーのもとに下ったマンビジュのハッサーンが、五四一／一一四六年カルアト・ジャウバルへの引き渡し交渉の使者として派遣されたのは、「両者の間にある友情」を梃子にするようにというザンギーの指示であった[44]。十字軍との親交の深いカルアト・ジャウバルとマンビジュとのつきあいが早くからあったとすれば、マンビジュと十字軍との親交はこの同盟以前に遡る可能性もある。

カルアト・ジャウバルでは、少なくとも一回目の捕虜釈放交渉の仲介をした時点から、ボードワン二世やジョスリーン一世とのつきあいが始まっていた[45]。一方、ユーフラテス川中流のヒッラの領主ドゥバイス・ブン・サダカは、セルジューク朝スルタンとの確執から活路をシリアに見い出そうと機会を伺っていたが、スルタン等との衝突のたびにカルアト・ジャウバルに身を寄せ、マーリク・ブン・サーリムを頼っていた[46]。また、かつてのアレッポ王スルターン・シャーも一時的に

カルアト・ジャウバルに亡命していた。[47] マーリク・ブン・サーリムがこれらの滞在者たちを結びつけたのが五一八／一一二四年に行なわれたアレッポ攻撃のための軍事同盟であったのである。ところで、この軍事同盟が成立するもとになったボードワン二世の釈放交渉を引き受けたシャイザルと、このカルアト・ジャウバルの接点は外交交渉中には見られない。しかし、シャイザルの領主スルターン・ブン・ムンキズの甥ウサーマ・ブン・ムンキズによると、「[カルアト・ジャウバルの] シハーブ・アッディーン・マーリクと、父ムルシド（スルターン・ブン・ムンキズの兄で前領主）との間には、親密なつきあいと手紙や使者の往来があった」ということである。[48]

また、前章で述べたように、シャイザルはアンティオキアの十字軍と貢納金協定を長期的に継続していたが、その裏には十字軍への便宜の供与が見られた。アンティオキアの領主シール・ロジャーがイェルサレムへあてた密使が十字軍地域のアファーミーヤとラファニーヤとの間にあるシャイザル周辺のムスリム地域を通行できるように護衛を引き受けたのである。またアンティオキアの十字軍側からの働きかけもみられる。ボードワン二世は二回目の釈放後、シャイザルが負っていたアンティオキアへの負債を免除するなどの利益供与を行なっているのである。[49] 十字軍とシリアの小都市との間の外交交渉には、便宜供与や、ボードワン二世等の十字軍指導者の捕虜経験の間に作られた親交が大きく働いていたのであろう。また、これらの小都市がこのような動きをすることが可能であったのには、その所在地の地理的要素も働いていた。次節で検討する。

（3）立地条件

カルアト・ジャウバルはアレッポからの亡命者を相次いで受入れている。[表] がその一覧である。ともにライース職[50]にあったバディーウ一族のサーイドとファダーイル（①、⑤）および、ワズィール（宰相）職にあったアブー・アルファ

［表］カルアト・ジャウバルへの亡命者

	年代	亡命者			状況
		在任地	為政者（追放者）	亡命者名（肩書き含む）	
①	507／1113	アレッポ	アルプ・アルスラーン	サーイド・ブン・バディーウ（ライース）	リドワーン王の任命。512年イールガージー政権成立の際に復帰を図るも暗殺される。
②	508／1114-15	アレッポ	ルウルウ	アブー・アフファドル・ブン・アルムースール（ワジール）	すぐに復帰
③	515／1121-22	アレッポ	スライマーン	スルターン・シャー（アレッポ王）、イブラーヒーム（王弟）他	同年イールガージーによりアレッポに戻される
④	517／1123-24	アレッポ	バラク	司教グレゴリー他（ヤコブ派教会関係者）	ジョスリーン１世によるモスク破壊（ボードワン２世救出のための示威行動）→アレッポ（カーディー）による報復／教会破壊
⑤	522／1128	アレッポ	ザンギー	ファダーイル・ブン・バディーウ（ライース）	ティムルターシュ期からブルスキー政権まで在任。ザンギー政権成立で逃亡。
⑥	528／1133-34	ハマー	サラーフ・アッディーン・ムハンマド	シャラフ・アッディーン・ハバシー	次にマールディーンへ行き、ティムルターシュのワジールに。

ドル（②）は、政権交替に際して新政権からの逮捕・没収・追放の処分を受け、あるいは処分を恐れてカルアト・ジャウバルに亡命している。また、イールガージーのナーイブ（代理）であった息子のスライマーンによってカルアト・ジャウバルに追放されたアレッポ王のスルターン・シャーとその弟イブラーヒームほか（③）は、スライマーンの反乱をおさめた父イールガージーによってほどなくアレッポに戻されている。アレッポのヤコブ派教会の司教をはじめとする関係者（④）がカルアト・ジャウバルに亡命しているが、これは、バラクによって捕えられたボードワン二世がハッラーンに監禁されていた五一七／一一二三―二四年のことであった。[51] ボードワン二世救出のためにバラクを威嚇するジョスリーン一世が、アレッポ周辺のモスクやマシュハドを破壊したことに対し、アレッポのカーディー、イブン・アルハッシャーブがこれらのモスク等の修復をアレッポのヤコブ派とメルキト派（ギリシア正教）の司教たちに命じたが、拒絶されたためにキリスト教会の内部を破壊してミフラーブを設け、モスクに転用した。ヤコブ派とメルキト派教会のほかにネストリウス派教会に対しても同様であった。教会や修道院の居室も破壊されたため、メルキト派はアンティオキアへ、ヤコブ派はカルアト・ジャウバルへ逃げたのである。[52] 多様な亡命者たちのカルアト・ジャウバルでの滞在は、永久的なものではなく、みずからの政治生命の復活を狙うまでの一時的なものであった。カルアト・ジャ

ウバルがアレッポ方面からの亡命地となった理由については、シリアから距離があり、ユーフラテス川左岸（東岸）に位置するため渡渉を要するという地理的な条件と独立領主であったことが、緩衝地帯としての役割を果たし、アレッポ政権からの亡命者受入れを容易にしたのであろう。[53]

ユーフラテス川上流のおもな渡渉地点は、カルアト・ジャウバルの他に、北からビーラ（左岸）、カルアト・ナジム（右岸）、バーリス（右岸）、ラッカ（左岸）などである。ビーラは、ルハー（エデッサ）とテル・バーシルを結んでアンティオキアへの交通路を成し、マンビジュの勢力下にあることの多かったカルアト・ナジムは、ジャジーラのナシービーンやハッラーンとマンビジュを結ぶルート上にある。またバーリスはジャジーラからアレッポへの最短ルートを形成する渡渉地点であり、川港としても優れていた。ラッカは、ダマスクスへの直行ルートの他、シリアとジャジーラの複数の交通路の結節点であった。[54] このうちのバーリスとラッカは、前述のように、カルアト・ジャウバルとともにウカイル一族がセルジューク朝スルタンから、アレッポ放棄の代償として得たものである。

ユーフラテス川右岸の稜障の上に建てられたカルアト・ジャウバル（ジャウバル城塞）は、バーリスとラッカの中間の要害の地であり、ウカイル一族の本拠地としての守りも固かった。しかし、バーリスに関しては、シリアとジャジーラの複数の勢力の間で領有権が移動していたのである。ウカイル一族の手を離れたあとに、モースルの領主ジャーワリーの一時的領有をはさんで、アレッポのリドワーン王が領有していたが、アレッポの政権の混乱の中で、五一一／一一一七年、アレッポ市民は、アレッポの政権奪取を狙うイールガージー・ブン・アルトゥクに、牽制策としてバーリスを差し出した。ところが、アレッポ獲得の交渉がすすまないため、イールガージーはそのバーリスをカルアト・ジャウバルのマーリク・ブン・サーリムに売却した。バーリスは約二〇年ぶりに再びカルアト・ジャウバルのウカイル一族の領有となったのである。五一六／一一二二年、アレッポを支配していたイールガージー[55]が死亡すると、十字軍はユーフラテス川沿岸地域の各所に侵攻した。ジャジーラ地方に本拠地があり、アレッポの政権を併せ持つアルトゥク一族[56]の間で後継者の新政権が安定

するまでの約半年間の混乱の隙をついてのことである。アンティオキアのボードワン二世は、ビーラとバーリスを攻撃した。この二カ所の渡渉地点への十字軍の攻撃とムスリムの防衛の方法の中に各勢力の政策を見ることができる。十字軍はビーラには引き渡しの要求をしたが、バーリスには複数基の投石機を用いる大規模な攻撃をしたにもかかわらず、一時金の要求をするに留まっている。一方、ムスリム側の防衛では、ビーラへは他のムスリム勢力からの援軍派遣の形跡はなく十字軍への引き渡しが実行されたが、バーリスではジャジーラ地方のアルトゥク一族、アレッポからの援軍、バーリスの市民や馬といわば総出で十字軍に立ち向かい、ボードワン二世の敗退に終わっている。[57]

新しい領土の領有には、支配権を浸透させるために軍隊や監督者の派遣が必要である。十字軍にとってビーラの領有は、シリアとジャジーラに分かれているエデッサ伯国をつなぐ渡渉地点の確保という利点の上に、領土が近く防衛面での負担の少ないものであった。これに対して、バーリスは通商路としての利便性は認められるが、[58]十字軍にとっては飛び地の領土となるため、支配を定着させることが難しい。また、かつてボードワン二世とジョスリーン一世の解放交渉の仲介役をつとめたカルアト・ジャウバルのマーリクの所有するバーリスを奪うつもりはなかったと考えられる。一方、マーリク側がこの一時金要求に応じなかった理由として、イブン・アルアディームは「ボードワン二世の要求が過度であったため」[59]と述べている。ボードワン二世があえて大きな課金を試みたのは、アレッポとジャジーラを支配するアルトゥク一族の代替わりの混乱期にはバーリスやその領主であるカルアト・ジャウバルには援軍が来ないと考えたか、あるいはカルアト・ジャウバルの勢力が大きくなりすぎないようにと考えたかのいずれかである可能性は大きい。

このバーリス包囲から半年もたたないうちに、ボードワン二世は、再び捕虜となりその約二年半後、五一八／一一二四年の釈放直後に、カルアト・ジャウバルのマーリク・ブン・サーリムの仲介で、アレッポを攻撃する軍事同盟を結んだ。前章で検討したように、ボードワン二世のもくろみは、アレッポの政権はヒッラの領主ドゥバイス・ブン・サダカに渡して、経済的利益だけを得るというものであった。この考え方は、バーリス攻撃と同根である。ユーフラテス川岸の渡渉地

点は防衛上有益であるが、領有して遠くからコントロールすることは経済的負担となる。十字軍にとって、自領から離れた土地はムスリムと組んでその利益だけ得ることが効率的であったのである。また同時に、このような十字軍との外交関係をもつ小都市の存在自体が、シリアの大都市と十字軍との間の緩衝地帯の役目も果たした。ここに小都市の独立政権が存続する余地があったのである。ボードワン二世が、かつて捕虜釈放交渉の仲介を頼んだカルアト・ジャウバルの領有するバーリスを包囲したのは、一時金の獲得という実利と、同時にその勢力均衡を保つための牽制でもあった。

第三章　勢力均衡構図の揺らぎとシリア小都市

(1) ザンギーのシリア進出と南進策の開始

イマード・アッディーン・ザンギーが、アレッポに政権を確立したのは、五二二／一一二八年のことである。これ以前のアレッポでは、シリア・セルジューク朝のリドワーン王が五〇七／一一一三年に死亡したあと、不安定な短期政権が続き、五一一／一一一七―一八年以降は、カーディーなど在地の民間勢力が中心となってジャジーラ地方から相次いで統治者を招いていた。五一一／一一一七―一八年からのイールガージー・ブン・アルトゥク以下四代のアルトゥク一族と五一八／一一二五年からのアクスンクル・ブルスキー親子は、ジャジーラから軍事力を導入して十字軍と対決したが、ともに短期間で撤退あるいは暗殺により挫折した。しかし、同じジャジーラ出身のザンギーは、リドワーン王時代からの勢力均衡政策を継承せず、アレッポを拠点にしてシリア南進策を繰り返しながら勢力を増し、ユーフラテス川をへだてたシリアとジャジーラの両域の支配を拡大していった。シリア南部への進出は、対象がムスリム地域か十字軍地域かを問わないもので、五二四／一一三〇年のハマー獲得を皮切りに、ヒムスついでバアルベクとダマスクス政権下[60]の地域を獲得し、この

間に十字軍からは、バーリーン要塞、カファルターブ、マアッラ・アンヌアマーンの農地を獲得したのである。ザンギーの南進策は、それまでのシリアの勢力均衡構図を崩すものであり、肥沃な農業地域の収穫を分割するという合意のもとに安定していた、ダマスクスとイェルサレム王国の双方にとって脅威となった。[61]

本稿で検討している四つのシリアの小都市は、このザンギーの登場とその後の勢力均衡構図の変化にどのように係わったのであろうか。

(2) ザンギーの戦略とシリアの小都市

(a) マンビジュとカルアト・ジャウバル

ザンギーは、アレッポ進出の前年の五二一／一一二七年、モースルとアレッポをアターベクとして支配していたブルスキーとその息子が相次いで暗殺されたあと、旧ブルスキー政権のアミールたちを取り込んでセルジューク朝スルタンのマフムードに働きかけ、モースルとアレッポのイクターおよびアターベクの地位を得ていた。[62] そのザンギーのところへ、ブルスキー政権崩壊後のアレッポが内戦状態であるとの情報をもたらして、ザンギーのアレッポ進軍のきっかけを作ったのは、カルアト・ジャウバルのマーリク・ブン・サーリムである。[63] ザンギーはこの混乱を政権確立の好機と捉え、すぐさま側近のアミールを派遣して事前折衝を行なった上で、アレッポに進軍した。この進軍途上で、ザンギーはマンビジュをたやすく獲得した。マンビジュの領主ハッサーンはアレッポの政変に際してアレッポを包囲しており、不在であったのである。[64] ザンギーにとって、マンビジュの立地条件は、ジャジーラ・シリア間の移動の際の拠点とテル・バーシルの十字軍に対する前線基地としての性格を兼ねていた。さらにアミール（武将）のハッサーンには軍事力の供給源としての役割を担わせることが可能であった。ハッサーンは、アレッポの統治権を獲得したザンギーのもとに下り、以後ザンギーの数々の

遠征に参加することになった[65]。

一方、カルアト・ジャウバルは、領主マーリクによる五二一／一一二七年のザンギーへの情報提供のあと、ザンギーがアレッポの覇権を獲得すると、ユーフラテス川の渡渉地点であるバーリスをザンギーに売却した[66]。しかし、このようなザンギー寄りの行動を行ないながら、この間に、ザンギー政権からの亡命者、いわば反対側の人物を引き受けている。［表］の⑤に示すファダーイル・ブン・バディーウは、アルトゥク一族のティムルターシュ期からブルスキー政権までアレッポでライースの地位にあり、ブルスキー政権崩壊後の内戦状態の中で、アレッポの人々の支持を受けていた人物である[67]。また、五二八／一一三三―三四年、ザンギーの参謀役をつとめていたサラーフ・アッディーン・ムハンマドの不興を買ったシャラフ・アッディーン・ハバシー（［表］の⑥）の亡命も受け入れている[68]。ザンギーによるモースルからシリアへの勢力拡大に伴って、アレッポへの通路にあたるマンビジュの領主は前述のように早々にザンギーの支配のもとに下ったが、カルアト・ジャウバルはしばらく独立を保っていたのである。

しかし、五二九／一一三五年カルアト・ジャウバルの領主マーリク・ブン・サーリムが死亡すると、ザンギーはダマスクスへの遠征途上でマーリクの息子ムサイイブが治めていたラッカを策略によって獲得した[69]。その後、五三九／一一四四年、ルハー（エデッサ）を獲得してジャジーラから十字軍を追い出すことに成功したザンギーは、次いでウカイル一族最後の拠点カルアト・ジャウバルを狙った[70]。この包囲は、代替地を用意する引き渡し交渉であったが、ザンギーが交渉役に指名したのは、マンビジュの領主ハッサーンで、両者の間にある「友情」を用いるようにというものであった。ハッサーンの説得に対し、マーリクの息子のアリーは、マンビジュ事件のバラクの故事を持ち出し、ザンギーの要求を受け付けなかった[71]。アリーはザンギーの奸計を恐れて引き渡し交渉に応じず、一方のハッサーンは我が身の安全を願って積極的な攻撃を行なわなかった。五四一／一一四六年ザンギーがカルアト・ジャウバル包囲中に暗殺されたためこの戦略は中断されたが、各勢力の間を仲介しつつザンギー登場後も独立性を守ってきたカルアト・ジャウバルは、マーリク・ブン・サーリ

ムの死亡とザンギーの両域経営の進展の前に勢力を弱めたのである。

(b)シャイザル

ザンギーによるシリア南下政策の波の中で、五二九／一一三五年、シャイザルはザンギーの傘下にはいることになった。[72] この時期の十字軍勢力の覇権の推移をみると、シール・ロジャー戦死後アンティオキア公を兼務していたイェルサレム王ボードワン二世は、五二〇／一一二六年、イタリアから初代アンティオキア公の息子ボヘモンド二世が到着すると、アンティオキアをボヘモンド二世に明け渡し、イェルサレムに戻った。しかし、この新公ボヘモンド二世は五二四／一一三〇年に死亡、その後アンティオキアは内紛状態に陥り、さらに、イェルサレム王ボードワン二世も五二五／一一三一年死亡した。[73] この状況下で、五二七／一一三二年、十字軍勢力内で内輪もめが起こっている。イブン・アルアスィールによると、

この年、シリアのフランク内で意見の不一致 khulf が起こり、互いに殺しあうに至った。これ以前にはこのようなことは起こらなかった。フランク内部で多くの人々が殺された。[74]

という。イブン・アルアディームもほぼ同内容を「内乱 fitan（fitna の複数形）」という表現を用い、死者のうちの一人がザルダナーの領主であると述べている。[75] この内輪もめの原因については史料には直接の言及はないが、イブン・アルカラーニシーはボードワン二世の死亡を伝える記述の中で、ボードワン二世の行政手腕に対する賛辞を述べ、さらに、

[ボードワン二世は] 戦い muḥārabāt の時も、協定 muṣāfāt の時も、有名な策略やよく知られている欺きで切り抜けた。彼の後には適切な判断と正しい行政手腕を持った人物は現れなかった。彼の後継者のフールク・ダンジューは、（略）判断力が健全とは言えず、経営手腕も持ち合わせていなかった。従って、ボードワン二世を失ったために、フランクは混乱し、この後相争うようになった。[76]

と述べている。[77]

次のイェルサレム王フールク・ダンジューとアンティオキア公レイモンは、ともに西欧からの入婿である。彼らの代からは、シャイザルと十字軍との協定は見られないことから、人脈の断絶が背景にあると考えられる。ここでシャイザルは勢力均衡の舵をザンギーの方へとったのであろう。[78]

これまで十字軍との友好関係を保って独立していたシャイザルは、ザンギー傘下に入ってからは、アレッポ政権とどのような関係を持ったのであろうか。五三〇／一一三六年、アレッポのナーイブ（代理）でザンギーからシリア北部の軍事を任されているシワール・ブン・アイタキーンが、アンティオキア公国の海港ラタキア方面への略奪を行ない、多くの略奪品や捕虜をもたらしているが、[79]この拠点としてシャイザルが使われたのである。シリア中部にあるシャイザルの立地条件を利用したものであった。また、五三二／一一三八年のビザンツ皇帝によるシャイザル包囲に際してのザンギーの対応は、当時行なっていた南進策の一環であるヒムス包囲を止めることなく、ビザンツ・十字軍連合軍への食糧供給の遮断などの側面攻撃や、ビザンツ皇帝と十字軍との離間を図る情報戦[80]の展開などを行ない、大きな軍事力は用いていない。シャイザル側の応戦の様子は史料には見られないが、シャイザル自体が二四日間の包囲を持ちこたえたことは確かで、ザンギーはシャイザルの従前からの統治力や経済力、軍事力を利用していたと考えられる。ビザンツ軍の退却の直接のきっかけは、ムスリム側史料に見られる「ジャジーラからの援軍の到来の知らせ」であるが、キリスト教徒側の史料はこぞって「シャイザルからビザンツ皇帝への一時金や贈り物の提供」を挙げている。[81]真偽は別として、これはシャイザルの十字軍に対するこれまでの接し方を象徴しているといえるだろう。[82]

(c)アザーズ

五一一／一一一八年以降アンティオキア公国の勢力下に入っていたアザーズに対して、歴代のアレッポの統治者は奪回

を試みた。しかしザンギーに関しては、シリア北部の軍事行動を任せたシワール指揮の別働隊を含めて、アザーズ奪回の試みは史料中に見られない。アレッポは長期にわたる戦乱で極度に疲弊していた。十字軍が総力を挙げて防衛するほどの重要な農業地であるアザースを、アレッポに拠ったザンギーはなぜ奪回しようとしなかったのであろうか。ザンギーがアレッポに政権を確立したとき、当面の敵は北方のアザーズの十字軍ではなく、西方のアサーリブの十字軍であった。アレッポはアサーリブの十字軍と、アレッポ西方地域の収穫分割を行なっていたため、十字軍がアサーリブを拠点にアレッポへたびたび侵入し、略奪を行なっていたのである。五二四／一一三〇年、ザンギーはアサーリブを徹底攻撃し、以後、侵略の口実を作ることになる収穫分割協定は結ばなかった。しかし、その後も、ザンギーは北方のアザーズ奪回には動かず、シリア南進策をとり、マアッラ・アンヌアマーンなどの農業地をアンティオキアの十字軍から奪っている。

このザンギーの政策には次のような背景が考えられる。五二四／一一三〇年、アンティオキア公国ではボヘモンド二世が死亡し、以後後継者をめぐって内紛が起きていたため、公国の境界線の防衛は脆弱であった。一方、アザーズの支配権は、十字軍勢力の内部で、アンティオキア公国からエデッサ伯国に移っていた。[83] エデッサ伯ジョスリーン一世は、ジャジーラ西端のエデッサとシリア北部のテル・バーシルの二ケ所を拠点としていたが、アザーズは、このテル・バーシル地域の南西端にあたる農業地であった。五二五／一一三一年、ジョスリーン一世の死亡に伴いエデッサ伯を継いだ息子のジョスリーン二世は、商業都市のエデッサよりも農業地域であるテル・バーシルの支配に重点を置いた。[84] したがってテル・バーシル地域の農業地としてのアザーズの重要度は高く、その守備は堅固であったと考えてよいであろう。このため、ザンギーは、アザーズよりも境界領域の守備の手薄になっているアンティオキア公国領への攻撃を優先させたことが考えられる。また、ザンギーの南進策は、最終的にダマスクスをめざすものであった。したがって、反対方向にあたるアレッポ北方における十字軍との戦闘は避けたと考えられる。アザーズをテル・バーシルの支配下に留めておくことは、エデッサ伯国のジョスリーン二世がアレッポへの侵略をひきおこさないための緩衝地帯の役割を担わせることになるのである。

おわりに

十字軍勢力とシリア小都市との外交交渉は、経済協定のみならず軍事同盟においても経済的利益の享受が第一の目的であった。また、シリアの勢力均衡構図の中で、これらの外交関係の存在自体が大都市への牽制となり、その結果、シリア小都市は緩衝地帯の役割を果たしていたのである。ところが、ザンギーのシリア南進策開始とほぼ時を同じくして、これらの小都市と十字軍との外交交渉が見られなくなった。最大の背景は十字軍勢力の世代交替である。五二四／一一三〇年にアンティオキア公国のボヘモンド二世が、五二五／一一三〇年にイェルサレム王国のボードワン二世と、エデッサ伯でテル・バーシルも支配していたジョスリーン一世が、それぞれ死亡した。自らの勢力の拡大をめざしながらも、日々の糧食の確保という経済上の目的から共存の道を探り、数多くの協定を締結して、いわば共存システムとしての勢力均衡構図を作り出してきた世代が交替した。このことは、十字軍と独自に交渉して独立を保っていたシャイザルやカルアト・ジャウバルのような小都市の領主が十字軍との人脈を失ったことを意味する。これまでシリアの勢力均衡構図の中で、キャスティングボートを握ってきた小都市が存立基盤を失うことになり、ザンギーに従わざるをえなくなった。シャイザルが大きな戦闘や威嚇を受けなかったにもかかわらずザンギーに従ったのは、むしろザンギーに乗り換えたと考えるのが順当であろう。

ところで、勢力均衡構図の中でつちかってきた自前の統治システムや軍事力をもつこれらの小都市の存在は、ザンギーにとって利用価値のあるものであった。ザンギーはこれ以後、これらの小都市を南進策の拠点として用いたのである。しかも、一挙に支配下に入れるのではなく、自身の戦略にあわせて順次とりこんでいる。ザンギーは、マンビジュを五二二／一一二八年のアレッポ進出当初から従えたが、これは、マンビジュがザンギーの本拠地であるアレッポとモースルやナ

シービーンとを結ぶ最短ルート上にあり、しかも領主のハッサーンは、機動力のある軍隊をもっていたからである。シリア中部のシャイザルがザンギーの傘下に入った五二九／一一三五年は、ザンギーがカファルターブなどのアンティオキア公国領の農地の獲得をめざしていた時期であった。また、ユーフラテス沿岸のカルアト・ジャウバルを本拠地とするウカイル一族の三カ所の領地に関しては、アレッポ進出時にバーリスを領主マーリクから購入し、ラッカをマーリク死亡直後の五二九／一一三五年に策略により獲得した。バーリス売買のいきさつは不明であるが、ラッカの獲得に関しては、領主死亡によるウカイル朝の混乱に乗じたというよりは、ダマスクス侵攻の準備が整ったことと、[85]ラッカがダマスクスへのモースルからの直行ルート上にあることを重視すべきであろう。しかし、ザンギーは、ウカイル一族の本拠地のカルアト・ジャウバルについては、しばらくの間、攻撃や干渉をせずにシリアとジャジーラの緩衝地帯として温存していた。カルアト・ジャウバルを攻撃したのは、ルハー（エデッサ）を征服して大きくジャジーラ地方の政治地図を塗り替えたあとの五四一／一一四六年であった。しかも故マーリクの息子アリーの軍事力を利用出来るように、領地替えを交換条件とする引き渡し要求を行なったのである。ザンギーが、包囲中のカルアト・ジャウバルに説得のための使者として送ったのは、アリーと交友のあったマンビジュの領主ハッサーンであった。

ザンギーは、エデッサ伯国領となっていたシリア北部の農業地アザーズに関しては、奪回はおろか略奪の動きすら見せていない。しかし、豊かな農地アザーズをテル・バーシルの勢力下に留めておくことは、北方の十字軍からのアレッポ近郊への侵略や略奪を防ぐことになる。すなわちアザーズは十字軍領にあって緩衝地帯の役割を担ったのである。またこれを長期的な農地の確保という観点から見れば、農業地アザーズを温存することになる。農業地は一旦戦場になると、その復興には多大な時間と労力が必要となるからである。従って、アザーズの奪回を行なわず、十字軍のもとに置いておくこともザンギーの戦略と考えることが可能であろう。

このように、ザンギーは、勢力均衡構図の変化にうまく乗り、勢力均衡構図の中で独立していた小都市をシリア南進策

の拠点として用い、あるいは適切な時期が来るまでは緩衝地帯として温存して利用したのである。

ザンギーはシリアの所領経営を、アレッポから順に領域支配の輪を広げていくという「面」の支配ではなく、拠点となる離れた都市をとびとびに確保して、その在地の領主や支配層を通じた「点」の支配から始めた。飛び地の支配は効率が悪いが、自立していれば拠点として有効である。本稿で検討した小都市のみならず、ザンギーのシリアでの本拠地であるアレッポさえもが該当する。これは、ビザンツ皇帝ヨハンネス二世のシリア遠征に際してザンギーが行なった対応を見ると明らかである。ヒムス包囲中のザンギーは、傘下のシャイザルにもアレッポにも援軍を送ったが、ヒムスの包囲は解かず、シャイザルやアレッポの市自体の防衛はそれぞれの在地勢力の従前からの自主的な動きを利用したのである。[86] ザンギーのシリア支配は、アレッポをはじめとするシリア諸都市の既存の統治システムの上にザンギー個人の政策を合致させる統治であった。すなわち所領経営という点で諸都市の利害とザンギーの政策が一致したのである。ザンギーによるシリアの統一は、これらの「点」を利用、吸収し、しだいに「面」の支配に移行していくことで成功した。

五四一／一一四六年、ザンギーの暗殺後シリアの統治を引き継いだ息子のヌール・アッディーンは、ザンギーの側近を引き続き登用し、ザンギーの戦略を継承した。本稿でとりあげた四つの小都市のうち、唯一十字軍支配下にあったアザーズを、五四五／一一五〇年テル・バーシルの領主ジョスリーン二世が捕虜となって不在の間に奪回し、次いで、マンビジュのハッサーンに命じてテル・バーシルを攻略した。[87] ここにマンビジュとアザーズとテル・バーシルの三点で囲む広大な農地を獲得したのである。ヌール・アッディーンはマンビジュとシャイザルについては、それぞれ、引き続きハッサーンとムンキズ一族の統治を認めていたが、これは対十字軍戦略の拠点として用いていたのであった。これに対して、対抗すべき十字軍勢力のいなくなったカルアト・ジャウバルのウカイル一族は他の領土との交換の形で放逐した。戦略的要素よりも、商業ルートとしての比重の高くなったカルアト・ジャウバルは自身の部下のイクター地としている。このような、対十字軍戦略とシリア統一を同時にすすめるというザンギー朝によるシリアの政治的統合の方式は、アイユーブ朝（一一六

九―一二五〇）には受け継がれたのであろうか。ザンギー朝期にアミールのイクター地となっていたシャイザル[88]とカルアト・ジャウバルは、そのままアイユーブ朝に下った。イクター所有者として支配権を持ち続けていたマンビジュのハッサーン一族も、五七一／一一七六年サラーフ・アッディーンのシリア進出後まもなく放逐され、マンビジュはアイユーブ朝のイクター地となった。本稿でとりあげた四都市すべてがアイユーブ朝のシリア支配が始まるころには自立性を失っていたのである。しかしその中で、アザーズとマンビジュについて、アイユーブ朝の一族が競ってその統治権を求めて争っていたことに注目する必要がある。このときシリア内陸部は、近隣の十字軍勢力をすでに駆逐し安定した農業地域となっており、対十字軍戦は海岸地帯に移っていたのである。ザンギー朝とアイユーブ朝との政治的統合のあり方の異同については、あらたな局面を迎えた対十字軍関係を把握した上で、今後検討していきたい。

本稿で用いた叙述史料と略称は次のとおりである。

アラブ・イスラム側史料

Abū al-Fidā': Abū al-Fidā', *al-Mukhtaṣar fī Akhbār al-Bashar*, Maḥmūd Dayyūb ed., 2 vols., Beirut, 1997.

A'lāq(S): 'Izz al-Dīn Ibn Shaddād, *al-A'lāq al-Khaṭīra fī Dhikr Umarā' al-Shām wal-Jazīra: Shimāl Sūriyā*, Yoḥyā Zakarīyā 'Abbāra ed., Damascus, 1991.

A'lāq(J): 'Izz al-Dīn Ibn Shaddād, *al-A'lāq al-Khaṭīra fī Dhikr Umarā' al-Shām wal-Jazīra*, Yaḥyā Zakarīyā 'Abbāra ed., Damascus, 1978.

'Aẓīmī: Al-'Aẓīmī, *Ta'rīkh Ḥalab*, I. Za'rūr ed., Damascus, 1984.

Azraq: C. Hillenbrand, The Arabic Text of Ibn al-Azraq's Chronicle, *A Muslim Principality in Crusader Times: The Early Artuqid State*, Leiden, 1990, 148-216.

Bāhir: Ibn al-Athīr, *al-Ta'rīkh al-Bāhir fī al-Dawla al-Atābakīya*, A.A. Ṭalaymāt ed.,Cairo, 1963.

Bughya: Ibn al-'Adīm, *Bughyat al-Ṭalab fī Ta'rīkh Ḥalab*, S. Zakkār ed., 11 vols., Damascus, 1988.

Bustān: Cl. Cahen, Une chronique Syrienne du VIe/VIIe siècle: Le "Bustān al-Jāmi' " ('Imād al-Dīn), *Bulletin d'Études Orientales*, 7-8(1937–38), 113–158.

Kāmil: Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh*, X, XI, J. Tronberg ed., 1864, repr, in Beirut, 1979.

Mufarrij: Ibn Wāṣil, *Mufarrij al-Kurūb fī Akhbār Banī Ayyūb*, Jamāl al-Dīn al-Shayyāl ed., vol. I, Cairo, 1953.

Qalānisī: Ibn al-Qalānisī, *Ta'rīkh Dimashq*, S. Zakkār ed., Damascus, 1983.

Rawḍatayn: Abū Shāma, *Kitāb al-Rawḍatayn fī Akhbār al-Dawlatayn al-Nūrīya wal-Ṣalāḥīya*, Ibrāhīm al-Zībaq ed., 5 vols., Beirut, 1997.

Zubda: Ibn al-'Adīm, *Zubdat al-Ḥalab fī Ta'rīkh Ḥalab*, II, S. al-Dahhān ed., Damascus, 1954.

Usāma: Usāma b. Munqidh, *Kitāb al-I'tibār*, P.K. Hitti ed., Princeton, 1930.

西欧側史料

Fulcher: Fulcher of Chartres, *A History of the Expedition to Jerusalem 1095–1127*, tr. by F. R. Ryan and ed. by H. S. Fink, Knoxville, 1969.

Kinnamos: J. Kinnamos, *Deeds of John and Manuel Comnenus*, tr. by C.M. Brand, New York, 1976.

Niketas: Niketas Choniates, *O City of Byzantium: Annals of Niketas Choniates*, tr. by Harry J. Magoulias, Detroit, 1984.

William: William of Tyre, *A History of Deeds Done beyond the Sea*, 2 vols., tr. by E. A. Babcock and A. C. Krey, New York, 1941, repr., 1976.

シリア地域史料

Matthew: Matthew of Edessa, *Armenia and the Crusades: Tenth to Twelfth Centuries: The Chronicle of Matthew of Edessa*, tr. by A. E. Dostourian, Lanham, 1993.
Michel: Michel le Syrien, *Chronique de Michel le Syrien : Patriarche Jacobite d'Antioche (1166–1199)*, J.B. Chabot ed., Paris, 1899–1905.
Syriac Chro: A. S. Tritton, The First and Second Crusades from an Anonymous Syriac Chronicle, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1933, I, 69–101, II, 273–305.

註

（1）ヨーロッパで使われる「十字軍 Crusade」という呼称は後世になって作られた術語で、同時代には使われていない。初出は一三世紀であるが、主に一五世紀に使われ始め、一七世紀には頻繁に用いられるようになった。十字軍参加者は肩に十字の印をつけることが多かったことから、のちの研究の中でこの宗教的遠征を総称して十字軍と呼ぶようになったのである。同時代の西欧中世の史料では、十字軍のことは「イェルサレム巡礼」や「聖地もうで」と呼ぶことが多く、シリアに定着した十字軍勢力については個別の地名や人名で呼んでいた。なお、アラブ史・イスラーム史でも、現代では「十字軍 salībīyūn」の語を用いている。本稿でも便宜上、これらの勢力を総称するときには「十字軍」の用語を用いることとする。

（2）十字軍の遠征の宗教的な意図を理解していなかったシリア諸都市は、ヨーロッパから来たこのキリスト教徒の武装集団に対してキリスト教徒 naṣrānī の語を用いず、単に西欧人一般をあらわすフランク firanj と呼んでおり、十字軍もシリアの政権の一つとして捉えていたため、このような外交交渉が生じたのである。

シリアという限られた領域の中で、戦闘状態にある両勢力の外交交渉は休戦条約の締結が主となる。この休戦条約の付帯事項に経済的取り決めが見られることが多い。また、条約の記録はなくても両勢力が一定の合意に達する事項があれば、外交交渉と呼んでよいであろう。拙稿では両勢力の合意事項を「協定」と総称している。

（3）中村妙子「一二世紀前半におけるシリア諸都市と初期十字軍の交渉—協定とジハードからみた政治—」『史学雑

誌』一〇九－一二（二〇〇〇）、一－三四頁。同「イマード・アッディーン・ザンギーの対十字軍戦略とシリア南進策―シリアとジャジーラの統一的支配―」『東洋学報』八八－一（二〇〇六）、〇一－〇二六頁。同「ヨハンネス二世のシリア遠征とザンギーの南進策―一二世紀前半シリアの勢力構図の変動」『オリエント』四九－二（二〇〇六）、七〇－九〇頁。

（4）ユーフラテス川左岸（東岸）に位置するカルアト・ジャウバルは、地理的にはシリアではなくジャジーラ地方に属する。しかし別記のように、カルアト・ジャルバルは、ウカイル一族がアレッポの代替地としてセルジューク朝から得た領地であること、同時にユーフラテス右岸（西岸）のバーリスも領有したこと、シリアとのつながりが強いことなどから、シリアの都市として扱う。

（5）*Zubda*, 520, 527, 533, 563; *Qalānisī*, 268, 272–273, 292–293; *ʿAẓīmī*, 370.

（6）中村「シリア諸都市と初期十字軍の交渉」一一―一四頁。

（7）*Zubda*, 561.

（8）*Zubda*, 505, 516－517.

（9）*Aʿlāq(S)*, 73.

（10）アレッポの勢力下でのアザーズのワーリーの地位が不安定であったことが、五〇八／一一一四年に起こった地震の際のアレッポの対処から窺える。カルア（城塞）が地震で破壊されたためアザーズのワーリーは被害が軽微であったアレッポに助けを求めた。しかし、アレッポのアターベクのルウルウは、そのワーリーと不仲であったため、ワーリーがアレッポに到着すると彼を殺し、アザーズには再建のために他の人物を派遣したのである（*Zubda*, 537）。

（11）*Zubda*, 546, 549, 550.

（12）*Zubda*, 550. 尚、*ʿAẓīmī*, 369. と *Bustān*, 118–119. では五一二年、*Aʿlāq(S)*, 84. では五一三年となっているが、いずれも、イールガージーがアレッポの支配権を得たのと同年に十字軍がアザースを獲得したことでは一致している。

（13）*Zubda*, 550.

（14）*Zubda*, 580.

（15）*Zubda*, 585; *Bughya*, 3480, 3483.

（16）*Zubda*, 586.

（17）*Zubda*, 595; *Kāmil*, X, 628; *ʿAẓīmī*, 375; *Syriac Chro*, 97-98; *Bustān*, 120; *Michel*, 221.

（18）*Aʿlāq(S)*, 100, 103; *Matthew*, 168.

（19）*Zubda*, 582.

（20）*Kāmil*, X, 619.

（21）*Zubda*, 582–584; *Kāmil*, X, 619; *ʿAẓīmī*, 374; *Syriac Chro*, 93–94; *Aʿlāq(S)*, 462–464.

（22）*Kāmil*, X, 369; *ʿAẓīmī*, 354; *Bāhir*, 8; *Aʿlāq()*, 48, 77, 111–112.（*Kāmil* には四七九年とある）

(23) *Syriac Chro*, 78–81; *Michel*, 195–196; *Kāmil*, X, 373-375; *Matthew*, 192–194; *Zubda*, 512; *Qalānisī*, 232.

(24) *Syriac Chro*, 81.

(25) ボードワン二世の身代金の金額については、史料により、七万ディーナール（*Syriac Chro*, 80-81; *Michel*, 195-196）、三万五千ディーナール（*Kāmil*, X, 375460）、三万ディーナール（*Matthew*, 201）と開きがある。しかし、十字軍国家の首長の身代金金額の他の例は、ボエモンド一世が一〇万ディーナール（四九五／一一〇一-〇二年）（*Matthew*, 191–192）、ボードワン二世が八万ディーナール（五一八／一一二四-二五年、前払金二万ディーナール）（*Zubda*, 585）である。この四九七／一一〇四年のハッラーンの戦いの後に決定した身代金の前払金の記述は、三万ディーナール（*Michel*, 195）か二万五千ディーナール（*Syriac Chro*, 80–81）であることから、前払金の記述がなく身代金金額が低い *Kāmil*, X, 375. と *Matthew*, 201. の記述は、前払金との混同がある可能性が考えられる。

(26) *Syriac Chro*, 81–82; *Matthew*, 201; *Zubda*, 517; *Kāmil*, X, 464–465; *Fulcher*, 180–181.

(27) *Syriac Chro*, 78–81; *Michel*, 195–196.

(28) エデッサ伯ボードワン二世は、五一一／一一一八年ボードワン一世の死亡にともない、イェルサレム王となり、エデッサはジョスリーン一世に譲った。ボードワン二世はさらに五一三／一一一九年アンティオキア公シール・ロジャーが戦死したあとはアンティオキアも併せて統治するようになっていた。

(29) *Zubda*, 570, 575, 577, 581; *Kāmil*, X, 613–614; *Qalānisī*, 330, 332; *'Aẓīmī*, 372; *Syriac Chro*, 91–92; *Michel*, 210–211; *William*, I, 539–541.

(30) 釈放条件の詳細は、身代金八万ディーナールのうち、二万ディーナールを前金とすること、アサーリブ、ザルダナー、アルジャズル、カファルタ―ブ、アザーズをアレッポ側に引き渡すこと、アレッポを狙って十字軍と接触しているドゥバイス・ブン・サダカと同盟しないことなどである（*Zubda*, 585; *Bughya*, 3480）。

(31) *Zubda*, 586–587; *Usāma*, 120.

(32) *Zubda*, 586–587; *Bughya*, 3480.

(33) *Zubda*, 586–580; *Bughya*, 3480–81, 3483–84; *Kāmil*, X, 623; *'Aẓīmī*, 374; *Bustān*, 113; *Syriac Chro*, 96; *Michel*, 221.

(34) この状態に決着をつけたのは、この混乱を収めてアレッポの政権を掌握したブルスキーであった。ブルスキーは、五一九／一一二五年、アレッポのカルア（城塞）に捕えていたムンキズ一族の子供たちを釈放する一方で、自身でシャイザルに赴いてそこに捕えていた十字軍の子供たちをスルターン・ブン・ムンキズから受け取り、八万ディーナールの身代金と交換に十字軍に返したのである（*Zubda*, 594–595）。尚、身代金金額については、*Michel*, 212, 223. には、「ボードワン二世の身代金は一〇万ディーナール」

とある。史料 *Zubda* の中でも、*Zubda*, 585. には、「八万ディーナール、うち前払金二万ディーナール」とあり、*Zubda*, 594–595. には「前払金二万ディーナールと八万ディーナール」とある。これは半年の時間経過のうちに、前払金の金額を総額の中に含んでいるか否かの混同が起こっていると考えられる。

(35) *Zubda*, 505, 516–517. 四九一／一〇九八年時のワーリーはウマル、五〇一／一一〇七—〇八年時のワーリーはフトルガで、前者はリドワーン王に殺害され、後者は追放された。

(36) *Zubda*, 550.

(37) 十字軍によるシリアのムスリム都市の征服に際しては、市政に関与している上層市民や軍隊は出国し、一般人は残留することが多い。一例として、五〇四／一一一〇年、イェルサレム王国とノルウェー船によるサイダー（シドン）占領の場合、*Fulcher* や *William* などの十字軍側史料に「兵隊は安全保障で出国させたが、農民はそのまま残した」とあり（*Fulcher*, 200; *William*, I, 488）、十字軍の農業重視の姿勢が窺える。

(38) *Zubda*, 522–525; *Kāmil*, X, 482–483,486–487; *Qalānisī*, 276, 278–283; *Bughya*, 3664–65. このときは、ムスリム側が水源を断つ作戦に出たため、十字軍との大きな戦闘には至らなかった。

(39) *Zubda*, 538–540; *Kāmil*, X, 509–510.

(40) *Zubda*, 525. このほか、「ムンキズ自身とその一団」（*Qalānisī*, 283）「ムンキズの市民と軍隊」（*Bughya*, 3664–65）「軍隊」（*Usāma*, 73）などの似通った表現で「軍隊」の存在が見られる。

(41) *Usāma*, 151–152.

(42) バラクは五一七年ジュマーダーウーラー月／一一二三年七月アレッポの政権を獲得していた（*Zubda*, 576）。

(43) この中で起こったマンビジュ事件は、バラクのマンビジュに対する悪感情が原因であるとされている。*Zubda* では「ハッサーンに関する密告（内容不明）によって起こった悪感情による」（*Zubda*, 582）、*Syriac Chro* では「対十字軍戦に非協力的であるから」（*Syriac Chro*, 94）と述べられており、マンビジュと十字軍との何らかの接触の可能性は否定できない。

(44) *Bāhir*, 73–74; *A'laq (J)*, 113.

(45) ジョスリーン一世は、カルアト・ジャウバル等を略奪することがあったが、マーリク本人が略奪品の返還を求めると、かつての恩義を感じ、返済している（*Usāma*, 89）。

(46) 514 年 : *Zubda*, 561–563、525 年 : *Zubda*, 611.

(47) *Zubda*, 564, 566.

(48) *Usāma*, 130, 224–225; *A'laq (J)*, 112. 尚、*Syriac Chro* には、「両者は親戚」（*Syriac Chro*, 279）とあるが、これは親しい往来を指すものであろう。

(49) *Usāma*, 87, 120.

(50) ライース職は、都市の治安維持に責任をもつ職であったが、必ずしも統治者の任命によるものではなく、市民層とともに自治的な行動にでることもあった。その時々の政権の動向により職務が一定していない。詳しくは、谷口淳一「ハラブ史の中のライース達」『西南アジア研究』四九（一九九八）、三四―五二頁参照。サーイドとファダーイルの事績については、同書、三七―三九頁参照。

(51) ① *Zubda*, 534, 550; *'Aẓīmī*, 369. ② *Zubda*, 537. ③ *Zubda*, 564, 566. ④ *Syriac Chro*, 93–94. ⑤ *Zubda*, 607; *Kāmil*, X, 650; *Mufarrij*, I, 39. ⑥ *Azraq*, 164.

(52) *Zubda*, 578–579; *Syriac Chro*, 93–94.

(53) ①のサーイド・ブン・バディーウを受け入れる少し前、マーリク・ブン・サーリム自身がアレッポから逃げ出している。マーリク・ブン・サーリムは、カルアト・ジャウバルを領地としているが、形式的にはシリア・セルジューク朝の家臣であった。五〇七／一一一四年、アルプ・アルスラーン王がアミール（武将）たちをカルア（城塞）に集めたとき、王の狂気に気づき、アレッポでの立場を捨てて逃げ帰ったのである（*Zubda*, 535; *Bughya*, 1985）。以後、名実ともに独立領主となった。

(54) Elisséeff, Nikita, *Nūr al-Dīn: Un Grand Prince Musulman de Syrie au Temps des Croisades*, I, Damascus, 1967, 147-154. 尚、バーリスに関しては、Raymond, André and Jean-Louis Paillet, *BĀLIS II: Histoire de Bālis et fouilles des îlots I et II*, Damas, 1995. があり、バーリス遺跡発掘の記録とバーリス史の概観から成っている。

(55) 結局アレッポの市民は、一旦は断ったイールガージーにアレッポを委ねた（*Zubda*, 549）。

(56) アルトゥク一族の動静については、中村「ザンギーの対十字軍戦略」参照。

(57) *Zubda*, 573; *'Aẓīmī*, 372; *A'lāq (J)*, 120; *Bustān*, 119.

(58) 少なくともアイユーブ朝期にはかなりの商館があった（Raymond, *BĀLIS II*, 101–104.）。

(59) *Zubda*, 573.

(60) ダマスクスは、セルジューク朝の名目的な宗主権のもとで、ブーリー一族が政権を保って周辺都市や地域を政権下に組み込み、十字軍勢力やザンギーと対峙していた。

(61) 中村「ヨハンネス2世のシリア遠征とザンギーの南進策」七八－八頁。

(62) *Kāmil*, X, 645; *Mufarrij*, I, 40.

(63) *Zubda*, 605; *'Aẓīmī*, 377.

(64) *Kāmil*, X, 650; *Bāhir*, 38; *Abū al-Fidā'*, II, 62; *Rawḍ ataym*, I, 118; *Mufarrij*, I, 38. このときザンギーはマンビジュ西方のブザーアも獲得している。ブザーアの領主もアレッポ包囲中であった。

(65) *Zubda*, 616; *'Aẓīmī*, 386. ルハー（エデッサ）攻撃にも参加している（*Syriac Chro*, 282）。

(66) *A'lāq(S)*, 21.

(67) *Zubda*, 607; *Kāmil*, X, 650; *Muḫarrij*, I, 39. 谷口「ハラブ史の中のライース達」三九頁。

(68) ハバシーは、その後マールディーンへ行って、ティムルターシュのワジールとなり、先例のないほどの権威をふるった（*Azraq*, 164）。

(69) *Zubda*, 621; *'Aẓīmī*, 375-376; *Azraq*, 173, 177-178. ザンギーは、ラッカの領主ムサイイブ・ブン・マーリクを入浴準備のためとして浴場に入らせておき、その間にラッカを奪ったのである（*Zubda*, 621）。尚、マーリク死亡後のカルアト・ジャウバルは別の息子のバドラーンが継いだが、翌五三〇年頃その兄弟のアリーがバドラーンを暗殺してカルアト・ジャウバルを支配している（*Azraq*, 177-178）。

(70) ザンギーは、これより前の五三六／一一四一－四二年には、ウカイル一族が支配するユーフラテス川中流域のハディーサとアーナを獲得している（*Qalānisī*, 438; *Kāmil*, XI, 88; *Bāhir*, 64; *Muḫarrij*, I, 90）。

(71) *Bāhir*, 73-74; *A'laq (J)*, 113-114.

(72) *Zubda*, 623.

(73) シャイザルの領主スルターンの甥のウサーマは、著書『回想録』の中で、アンティオキアの十字軍領主のうち、ボードワン二世のみに好意的で、シール・ロジャーとボヘモンド二世を「フランク人の悪魔」と評している（*Usāma*, 118, 120-121）。

(74) *Kāmil*, XI, 8.

(75) *Zubda*, 615. また、*Qalānisī*, 374; *'Aẓīmī*, 393. も同内容を伝えている。尚、*Zubda*, 615. はこの出来事を五二六年のことであるとしているが、表記の誤りである。

(76) *Qalānisī*, 369-370.

(77) 尚、*Syriac Chro* には、「五二五／一一三〇年に死亡したジョスリーン一世の息子は理解力に欠ける若者であったが、父のあとを継いだ」（*Syriac Chro*, 100）との記述がある。

(78) これより前の五二三／一一二九年、シャイザルの領主スルターン・ブン・ムンキズの甥のウサーマ・ブン・ムンキズはシャイザルを出てザンギーの下に仕えた。ザンギーの参謀サラーフ・アッディーンの配下にはいり、五二九／一一三五年のダマスクス進軍、五三一／一一三七年のバーリーン包囲に参加している（*Usāma*, 150, 156）。

(79) *Zubda*, 624; *Qalānisī*, 402; *Kāmil*, XI, 40.

(80) ザンギーがビザンツ皇帝と十字軍に別々に使者を出し、ビザンツ皇帝には「シリアのフランクは最後にはルーム（ビザンツ）を見捨てるだろう」、十字軍には「もしルームが一つでもシリアの城を取れば、あなた方の土地を全部取ってしまうだろう」と脅して、両者の不和を招き戦意を挫こうとした（*Kāmil*, XI, 57; *Bāhir*, 56; *Muḫarrij*, I, 81-82）。

(81) 援軍：*Zubda*, 632; *Qalānisī*, 417; *'Aẓīmī*, 393; *Azraq*, 180. 贈り物：*William*, II, 96; *Syriac Chro*, 297; *Kinnamos*,

24; *Niketas*, 17-18.

(82) *William* によると、シャイザルにはかつても今（一三世紀）もキリスト教徒が多く住んでおり、十字軍はキリスト教徒への攻撃は避けたと述べている（*William*, II, 96）。

(83) *A'laq(S)*, 84; *Kāmil*, X, 628. ジョスリーン一世はアザーズの支配権を、五一六／一一二二-二三年、ジョスリーン一世の二度目の妻の婚資としてアンティオキア公国のシール・ロジャーから受け取ったのであった（*Syriac Chro*, 90）。

(84) *William*, II, 140-144. ジョスリーン二世が、テル・バーシルの支配を重視していたことは、エデッサの防備が手薄になり、ザンギーのエデッサ攻略を容易にする背景の一つとなった（中村「ザンギーの対十字軍戦略」〇一四-〇一五頁）。

(85) 中村「ザンギーの対十字軍戦略」〇一三-〇一四頁。

(86) *Niketas*, 17; *Zubda*, 629-630; *Qalānisī*, 416-416; *Kāmil*, XI, 56-57; *Mufarrij*, I, 78.

(87) *Zubda*, 666-7; *Qalānisī*, 481-482, 489; *A'laq(S)*, 84-85.

(88) シャイザルは、五五二／一一五七年、ハマーを中心とする大地震に襲われて城塞が倒壊し、ムンキズ家の領主や一族は全滅している（*Zubda*, 670）。

（お茶の水女子大学大学院　リサーチフェロー）